

特116

1709

觀世流改訂謄本

内一

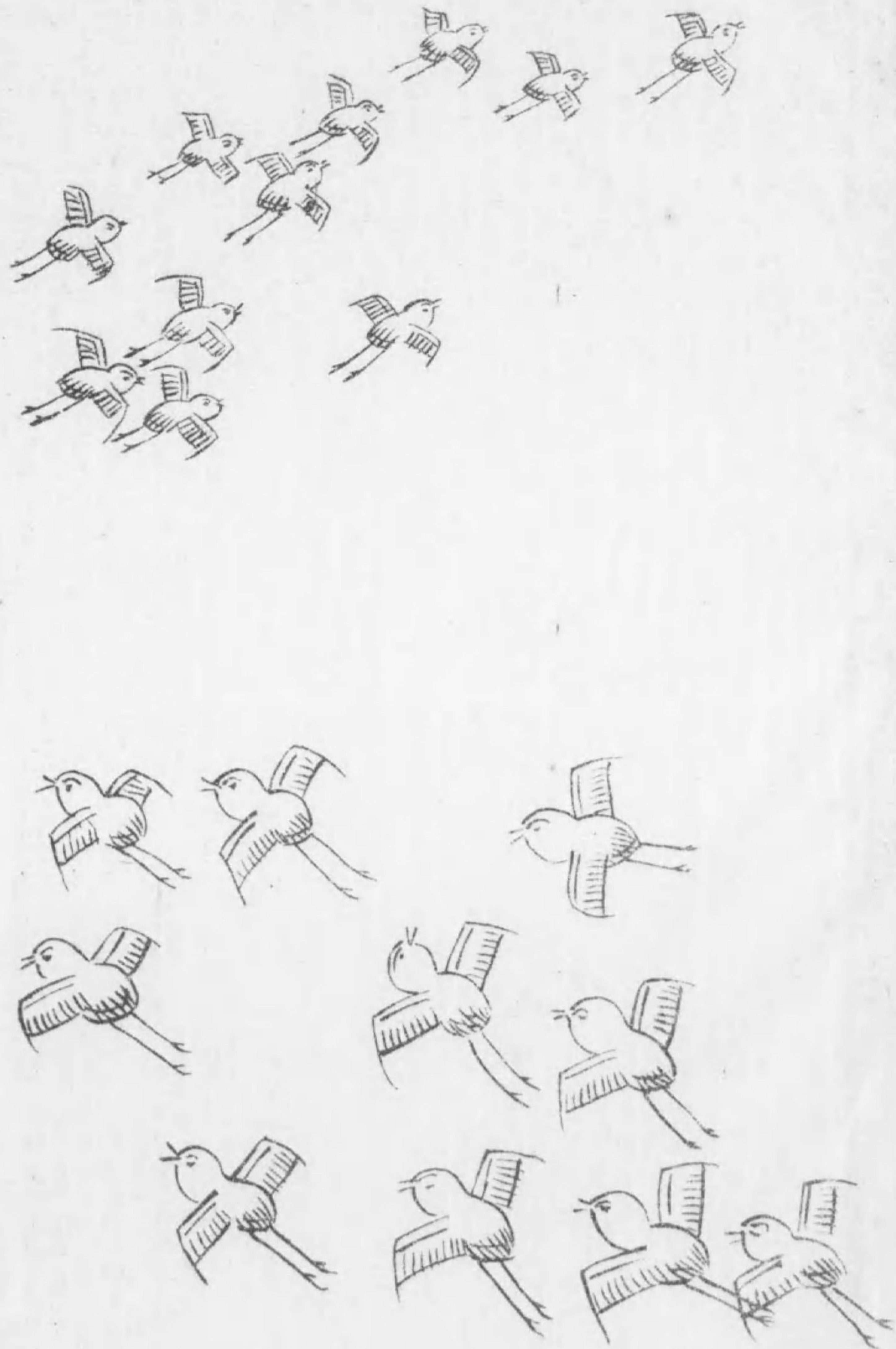
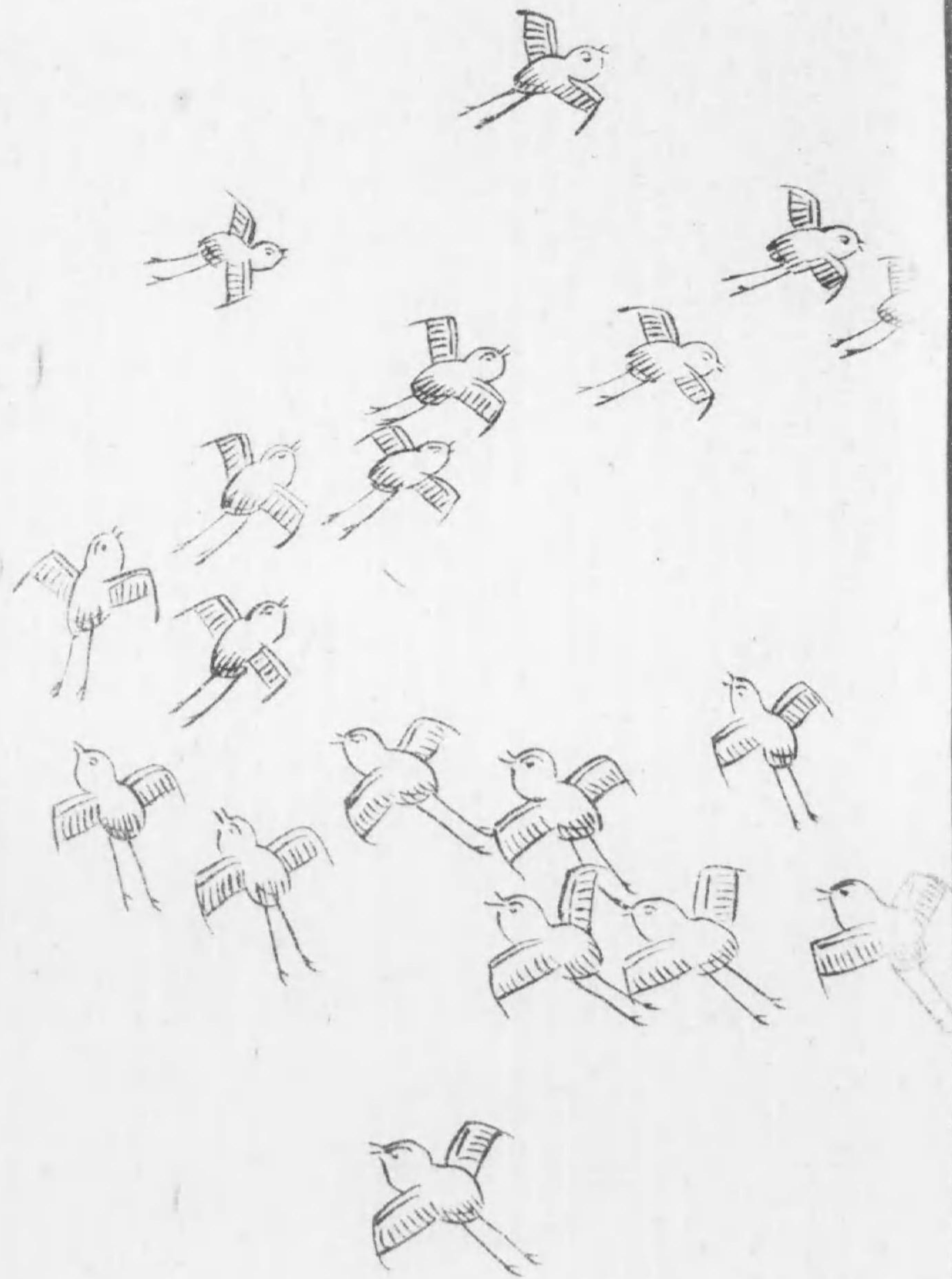
高砂
田村
江口
班女
鶉飼



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始







大正
10. 3. 29
内交

觀之清
世之長

文學博士

明治四十年

井上頼國 本文監修

丸岡桂本 文訂正

大正五年

丸岡桂 辭解并補訂

山崎樂堂 拍子附訂正

大正十年

山崎樂堂 拍子附再訂正

一

觀世流改訂謄本ハ明治四十年井上頼國、丸岡桂
 本文を慙へ觀世清之節附を訂し標音の正確精
 緻を期して發刊せしものあり爾來版を重ねる
 毎に校訂の遺漏を補ふこと五回に及びり然れ
 ども尚是らざる所ありやあらざる即ち記音の方
 法も多様の形式を並用せる事、拍子附の校訂も
 漏れたるものある事、曲中の詞も抑揚を示さざ
 る事等是あり是より於て更ニ從來の改訂本も
 一部節附の増補、記音樣式の統一並に拍子記號

の訂正を加へ添ふるも諸解説の挿入を以てし
たるもの即ち大正五年は發行せし大正版改訂
本あり

大正版發行後、版を累ぬること亦三回、其間毎
前版誤寫の訂正を怠らざりしが今回更は拍子
上の扱方よ於ける諸派の異同を對照し之が記
入の補訂を以て茲に第四版を發行すること
ありぬ

大正十年二月

觀世流改訂本刊行會

凡例

前附

- 一 解題は其一曲に就き概括的知識を得しむるを旨とし、作の結構、史實、作者等を極めて簡明に記述せり。
- 二 能樂の際、小書と稱し替の形を演奏するものハ「能之變式」の項を設けて其變化を説明せり、但し鼓笛の手に變化あるもの、舞又ハ演奏の形式ハ此等の變化あるもの等、註の上よさまで影印者を及ぼさざる小書は省略せり。
- 三 「註ひ方梗概」は新に其曲を學ばんとする者は豫備的知識を與ふること、及び之を註はんとする者に自己の役の要點を知らしむるを旨とし、序破急又ハ部分々々の心得の概要を役の別に從ひて摘録せり。
- 四 全篇を重き習物とせられたる曲の註ひ方ハ親しく所の教を受けざれば到底會得し難き種の心得ありて簡單に説明し難きのみならず、假に之を記述するも、此種の曲を註けん場合、輕忽に梗概に依りて註ふらぬ事あるは却て斯藝を文ある處あるを以て特に重習に限り「註ひ方梗概」の項を省略せり。
- 五 一曲中に普汎的なるもの特殊の註ひ方、特殊の節拍ハ、特殊の拍子當り等あるものは「注意すべき註ひ方」の項を設けて別に説明せり。
- 六 「辭解」は曲中の辭句の解、典故、考證等を掲げて一曲の文味を理解せしむるを努めたり。文中、掛詞の連鎖を以て修辭の優としたる所頗る多しけれども、此等を擧げて解せば徒に叙來の流を以て、特殊のもの外ハ他の解説は添へて記さざりたり。

欄外記事

- 七 本文の註、曲名の上下に、能の順位、季節、役名等を擧ぐるを例とせり。
- 八 能の順位ハ一番目を用ひらるるものを「脇能」と稱する例は從ひて記し、以下「二番目」

「三番目」等の語を以て表したり。頭に「歌」の字を冠したる歌式よりて代用せらるる場合の順位あり。素謡會の番組順も多くこの順位に従ふを例とす。

九 季節ハ曲の事柄の時事、又ハ之を謡ふに適當なる時季を表すものよりて、凡て古例に慣ひたり。従て新暦も共通せらるべき正月の季のもの、又は神事能等の目録より由るもの外に、凡て舊暦に依りたり。

- 一〇 役名列記の順序ハ素謡會に於ける右役の著席順に従ふ。
- 一一 詞の用キ、謡ひ方の相違等、師範大家の謡ふ所に二様あるものハ、觀せ清之の謡ひ一所に從ひて本文に記し、他を桐外に註記せり。
- 一二 小謡、獨吟、仕舞、雜子の箇所は、本文中其前後に●印を附して謡ふべき場所を明かし、桐外に之を説明せり。

本文

- 一三 本文の傍訓ハ一切假名遣法に依ることなく發音のまゝを記すこととせり。例ハ「チヨオ」と發音するものは、假名遣法に依れば「チフ」「テウ」「チャウ」「チヨオ」等の數種に別られども、悉く「チヨオ」とありたりとせり。
- 一四 漢字ニ字以上連續せる語にありては、字音にて讀むものハ其字向ハ細線を引きて圖割のものに區別したり。例ハ「松風」を「マツカゼ」と讀む場合ハ細線を挿入せり、「シヨウフウ」と音讀する場合は「松風」とありたりとせり。
- 一五 一字の讀方によりて書體を異にしたるものあり。「御」の字ハ「オ」に「ヨ」「オ」「イ」等數種の音又ハ訓を有するにより、「オン」と讀む場合ハ「オ」と書き、「ヨ」と讀む場合ハ「ヨ」と書き且つ濁点を施し、「ヨ」と讀む場合ハ「ヨ」と書き、「オ」と讀む場合ハ「オ」と書きとせり。又「中」の字ハ「ウチ」「ナカ」の二様は讀めども「ナカ」と讀む方多きより「ナカ」と讀む場合のみ「中」と書き、「ウチ」と讀む場合ハ假名書きとせり。
- 一六 次第の始め、上歌等の始終の一句に專り返しのあるものハ「〜」を以て表す、凡て

本文を重ね記したり。

- 一七 一曲の前段後段は別れたるものは必ぎ中入の後より行を改めて書き下したり。又二字以上の熟語ハカめて二行に專ることを避けたり。

謡ひ出し

- 一八 謡ふべき人の更ふ所毎に「」を附し其肩に役名を記せり。一役の儘より謡ひ續くる向は再び「」を附せり。一人より謡ひたる後、他の人を加へて連吟とある所も同じく「」を附せざるを原則とせり。
- 一九 従來の本ハ地謡の謡ふ所は「」を附せざる例あり。大正版ハ役更りを表すため其謡ひ出しは必ぎ「」を附したり。
- 二〇 役名、章、音位等を一所に併記すべき所ハ、先づ役名を記し、次に章の名称を記し、次に音位を記す順序は一定せり。例ハ「従來の本ハ」「上ロシギシテ」も「シテ上ロシギ」も書き一定せざりしを、まづ「シテ上ロシギ」としたるが如し。
- 二一 従來の本ハ地謡より謡ふ所に「地」と記したるは「地」と記したると二様あり。此相違古くは必要ありしものありべきも、三百年來其區別傳はらざる、今ハ二様も記す要なきものあれば大正版も「地」を廢して凡て「地」は一定せり。
- 二二 従來の本ハ一度「日」と記して地謡の謡ふべきを表したる續きハ二度「地」と記し、三度「日」と記したる類少かるを、大正版は一度「地」と記して地の謡ふべき事を表したる後ハ、二度記されたる「地」の記入を削除せり。
- 二三 従來の本ハ謡ひ出しに「下」と記して中音より謡ふ所と、同トく「下」と記して眞の下音より謡ふ所（クセのカキ）とあり。大正版ハ中音より謡ひ出す所ハ「中」、眞の下音より謡ひ出す所ハ「下」と記して其音位を明かしせり。

ト、ウ、イ、エ

- 二四 「ア」ハ音の當り意（當り下げを除く）。「ウ」ハ音を浮かせる意。「イ」ハ音を續けて附く

の意。之を原則として必ず記すべきもの、又稀に記さざるものも有りて後し、他を悉く前除せり。
「フ」の音を落し意を用ひの時ハ「フ」とし、音を抑ふる意は用ひる場合ハ「フ」にて區別せり。

二五 従来、下音より中音よ、下音より下中音よ、下中音より中音よ移るが如き場合ハ「ウ」の用ひられたる事あれども、移り行くべき音位を的確に標示せざるを以て、大正版ハ之を「中」「下中」等の確實な音位を指示する文字に代へたり。但し時として節附の關係上「ウ」を用ひる事の便利ありと思はる少敷く對して之を用ひたる場合あり。

二六 中音より上音よ移る階級の「中」「ウキ」を表す「ウ」、上音より「クリ」は移る階級及び中落も用意の「上」「ウキ」を表す「ウ」ハ、従来附せられたるに附せられざる事あり。之を附せざる事は一定されば誤り易からざるものあり、附せざる事は一定されば誤り易過ぎる憂あり、仍りて大正版も場合により或は用ひ或は用ひざる事とせり。

二七 柔吟ありて「イ」の附せられたる諸点の次の「落」字「節」又は「廻シ」は必ず一音位記し下げらる倒なり。此場合の「イ」ハ必ずしも記さずと限られざるも、落しことを表す有意味のものあれば悉く存置せり。

入クツシ

二八 柔吟中音のうちの「入」ハは通常「入」に記さるものと、「入りクツシ」と記さる記し方をともにものと二種あり。之を區別せん為に入クツシの方ハ「入」の傍に細字「ク」を加へて標示せり。

詞の開キ

二九 詞ハ「開キ」と記さる抑揚あり。用わらざるべき文字の右肩に小黒点・を附して標示せり。

息 継ギ

三〇 通常諸本の句讀長ハ、拍子の關係上當然句を切るべき所と、拍子の關係より見れば句を切るべき所も軽く息を継ぎて差支なき所とを區別することを全く一様ハ「〇」を附したり。前者ハ完全なる句切られども、後者ハ句切は非せり「息継ギ」あり。「息継ギ」ハ拍子より見れば必要なきものありて、之を大きく切らば為し「間」の外へべきものあり。故に前者は必ず附し

たれども、後者に依るべく有き、唯習慣上息を継ぐべき所ハ「〇」点を挿入せり。

三一 節ハハ文の形の上より息を継ぎ易き所とて、地拍子の關係上息を継ぎては外すべきものあり。此等ハ字と字との右傍に細線を引きて結びつけ其間を息継ギとをまじりてことを表したり。

三二 前後二句の句讀点あるを係らざる、前句の終りの諸点と次句の始の諸点を細線とを結び附けたるものあり。之ハ地拍子の關係上前句の句切を後句の第一字まで消さるのよて、通常の句切の如く句を切ること能はざる所を示す。

廻シ節、吞ミ節の大小

三三 従来の本ハは廻シの内側ハ「大」中「小」の二種の記入あるものあり。其中、「中」字を記したるものハ「中廻シ」と稱する節附の一形式とて、他の二種の拍子の關係上廻シを大きく或ハ小さく記すべき事を表すものあり。節の形式と拍子の記入と類似の形とては感ひ易きを以て、中廻シを表す「中」字は限りて「廻シ」の内側は記し、他の「大」「小」ハ廻シの右肩に細記す。

三四 従来の本ハは吞ミ節の内側ハ「大」「小」二種の記入あるものあり。是は共に拍子の關係上大きく又ハ小さく記すべき事を表すものあれども、「大」字を記したるもの中ハ「大吞ミ」と稱する感ひ方の形式は属すべきものをも混じ居たり。故に感ひ方は「大吞ミ」の内側ハ「大」字を記し、拍子は内側ハ「大」「小」の文字ハ外側右肩に細記す。

三五 「廻シ」及び「吞ミ」の右肩に附したる拍子上の記入「大」「小」は共に其節を大きく又ハ小さく記すことを表すものよて「大」ハ子音(まだ廻きる前、まだ吞まざる前)を大きく、小とあるハ子音を小さく記すの謂あり。次の向拍子の關係上、廻して後、吞みて後を引くと引かざるとは此記入ハ影響無し。

寄セ、走り、

三六 「平ノリ」の節の中ハ諸点數箇を細線とて連ねたるものハ地拍子の原則的ハ然と音を寄せて記さるべき事を表し、「ヨセル」と記入せざるものは其寄るべき數字より後細

ある長短の自由を有して地拍子も合ふべく寄せて謡ふべき事を表し、細線を引きたるより更に「ヨセル」と記入せるもの地拍子の原則的の懸然と寄せて謡ふ程度までハ猶是らざるが故に、一層著しく寄せて謡ふべき事を表すものあり。

三七 「大ノリ」の節は附せられたる「走り」の記号——は従来其位置明瞭ならず、大正版には其走すべき字句全部に記号の足延べしめたり。記号の頭ハ第一字と第二字との向より起まこと一一定せり。

三八 「大ノリ」の中、「走り」を表すより前項の記号を以てせよ、譜点を細線まで連続したるものあり。此場合ハ一句數字中の二字又ハ三字を「走り」にして謡ふべきことを表す。

三九 大正版は従来同知せられたる同拍子の記号「ヤ」「ヤア」「ヤハ」「ヤラ」を悉く訂正せり。一聯の句の上の句と下の句との句間ハ單に句讀点を施したるのみならず「ヤア」の向と同すは引きて初めて拍子も合ふべきもの類あり。此場合ハ特ニ括弧を附し「ヤア」と記して「ヤア」の長さの向を取らざるべき事を表したり。

第四版再訂要項

四〇 前版「打切」等の略号ある「ウ」ハ本版は於て悉く訂正し、大小地ハ「打切」去鼓地ハ「打上」打切「打込」拍子「打込打返」打上頭打切等、合方上異うたるものを悉く區別して記入せり。

四一 道行、中入地の終字、其他一局所の謡ひ止めは於て實地上具最終字を引くものよりハりを記入せり。

四二 大ノリ地中の「ヤア」「ヤラ」等の向ハ、實地上それだけの向を終字を引くものと、引かざりて單に句讀まで直よその向の取らざるものとあり。本版は於ては其後者は對してハ特ニ括弧を附して「ヤア」(「ヤラ」)等と一以て前者と區別せり。

四三 地拍子の取り方は於て、觀せれば三派の異同なきもあらざる、二派一致せるものハ之を本文より一派のみを當りを桐外に記入し、三派を異うたるものハ従来再訂本所載の取り方を本文より他の二種を桐外に記入するを原則とせり。

高砂

解題

阿蘇の宮の神主高砂の浦にて相生の松(高砂の松、住吉の松)の精に逢ひ、又住吉に至りて住吉明神の末現を拜することを作れり。夫婦和合、壽命長遠、國土安徳等の意を述べたるめでたき謡なれば、社寺の靈験を説くに上りたる他の神事能と異り、陽能中一随一の曲として右末新道に尊まる。世阿彌の作にして右名を相生又は相生松といへり。

能之小書

能の小書に太極 流シ八頭、八段之舞等あり。八段之舞の時ハ舞臺正面に松の作物を出す。

謡ひ方梗概

眞之陽能と云ひて陽能中の最も重きもの、祝言中の祝言なれば、謡の位も極めて杜重高高にとり長閑なる間に聲緩みなく、節扱ひも剛吟中の剛吟たるべし。

シテ

前は老樹の精に小半尉の面をかくる老人なれば、附物の中にも位殊に重き心あるべし。徳とてかゝるシテは細節に泥むべからず。先づ眞之一聲の出は調子を抑へて節扱を大きく替へ、中つたりと謡ひね風帆をたる鼓鼓あふべし。サシは改めて精さらりと扱ひ、下歌にて又調子を更へ、上歌は暢びくといふにも長閑に謡ふ。此上歌の「處は高砂の」の返一句はツレのみに謡はせてシテ謡はず。ワキとの同答は位を保ちて嚴かに、又「高砂住の江の」の連吟聊か直をかくて謡ひ、「昔の人の」以下前よりハ少しづつ位を迫り、懸念は漸次詰める心なるべし。次のサシは地と離れて確りと謡ふが宜し。ロンギは地よりハ精靜に位を保ちて謡ふ。後シテは前と異り堂々として謡大きく神舞舞の趣を表すべし。珠に出の「我見ても云」とハサシの調子をさらりと緩み無く而も剛健に謡ふを要す。以下地との懸念此要領にて謡ふ。終のロンギは少し東り心にて精麗やかに

ツレ

老姫なれば餘り調子を高めざるが宜けれど、獨謡ふ所は精輕めにさらりと運ぶ、シテと連吟の所は凡てシテに從ふ。ワキは三人なれども意誼は一人にて謡ふ。此ワキは由緒ある神職なれば、常の依傍などの如く輕やかには謡はず。殊に重き陽能なれば位を十分に取って清く淀み無く謡ふ。次第は旭の昇るが如くあるべし。シテとの懸念には少し位を捨て、一曲を引きたるに止むべし。待謡は春の舟行を叙したる道行なれば

地

初同「四海波靜」の一章は健かに淀み無具心にて長閑に流り無く謡ふ。此待謡を小謡に謡ふは僻事なり。く立板に水を流すが如き概あふべし。此一章は常に祝言の小謡に謡はる。婚禮の席にては返しを忌み「ゆたかなる」に優けて後の「君の恵ぞ有難き」と謡ひ收むるを右き例とせり。クワリは節毎き所をさらりと運び節ある所を精大きく謡ふ。「打カケ」とある記号は能の節大小鼓の打カケを聞きて謡ひ出すが故なり。クセは「安ならずや」までを序の位にて精靜に確りと謡ひ以下シテの上ヶ端までを破の位にて少し運びを附け、以下クセドメまでを更に進みて急の位に謡ふ。中入地は「うち

乗りてより少く運び「出でにけりや」と確り誰いとめて一寸抜き、返りより鎮めて誰ふ。後は「西の海」と聲の調子にて大きやかに張々と張つて誰い、以下シテより少し運んで乗り会い好く誰ふ。ロンギは調子好く引きて、誰ふ。キリは健かにさけりと端り無く喜びの心充ち満ちたる様に誰い收む。「千秋樂は」の小誰は能の附祝言を始め喜びの序に誰はうもものなり。

注意すべき謠ひ方

九枚裏の「千年の翠」の引は太鼓に松根頭といふ手のある所なれば能はては充分に引き越して誰ふ。意にても其心を以て引と少く大きやかに誰ふべし。

辭解 日も行く末ぞ云

旅衣の縁により紐の音を借りて日もと誰け更に光陰の行くと旅路を行くとに懸けて日敷の久きを叙す。

遙々云

此一章は衣の縁語を辞句の縁とせり。遠く(懸)立つ(懸)尾上の鐘 千載集に「高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜やおく

らむ」とあるを引く。大江匡房の歌なり。此歌後文に引きたり。歌の詞は単に山の鐘の聲を聞きて曉方の霜の音き渡りたるを思ひ違ひたし心は高砂と云ひ尾上と云ふも確と地名を括りて云ひたるに非れども後世此歌を解く者皆播磨の地名として解く。誰をかも 古今集に「誰をかも知る人にせむ高砂のねも昔の友ならなく」と。歌の意なり。此曲もこれに往へり。誰をかも 是れは長らへて意知は皆こと獨互に懸とするに似合はしと思ふ高砂のねも昔の友ならなくは今は誰をか知る人と頼まんとなり。播磨典風の歌なり。高砂といふ語は古今集以前のものに見る者なくとも古今集には其歌も多く取りかき其尾上のねは此集以後年久きもの聲に引かれたるが多し。

落葉衣

落葉の散りたりたる衣。浦風の縁にて落葉と云ひかく。かくなるまで 落葉掃くを断くに懸けたり。生の松 新集古今

ことは色も更らぬ同ト世にあはれいつまで生の松とあるを借る。生の松原は筑前の名所なり。

高砂住の江の松に相生の名あり

古今集の序に「高砂住の江の松もあひおひのやうに覺え云ふ」とある故か云へり。あひおひとは相違ひの意にて此序の詞は高砂の松、住の江の松なども我が松と相違ひ相違ひ相違ひに思ひ云ふといふ意にて同集に收めたる歌の種々の姿を書き列ねたる中の一つなり。同集巻第十に「我見ても久しなりぬ住の江の松のね松葉代経ぬらむ」と。住吉の岸のね松人ならん(笑)代か経るとはまきものこと。「斯くして世もや盡さむ高砂の尾上にまてらねらなく」と(以上何れも後人(笑)及前掲「誰をかも」の歌など一新に出でたり。これらは年久きものとせられたる住の江の松、高砂の松とあひおひの松に引き較べたるものなれば其序に斯く書きたるなり。それを後世誤りて相生又は相老の意に解きたるが適々此該曲着想の基礎となりたるものにて此曲は終始共に相生ならん共においたる二所のねとして扱ひたり。及りて興味あること云々。住の江は住吉の一名。

御時教に従いて紀貫之、凡河内躬恒等の撰びし歌集、教撰集の喟夫なり。尉、姥 老女 津の園住吉 津の園は攝津の古名、住吉は今の安立町附近一帯の地なり。申さ給へ 申させ うたての仰 仰(け)からぬ 比 比(に)の約 妹背 妹背(あ) 高砂といふは上代の云 口碑によれば、相生の松とはめでたき説の意にて高砂とは昔の萬葉集を指し住吉とは今の相老と云いて傳代と壽きたる譬喩なりといふ意なり。古今秘説の説を引ききたるなり。延喜の代と今此不審春 不審の晴るを 光和 和光同座の語を借り用ひ 四海波静に 後拾遺集の序に「おが君四つの海波の聲聞えず云々」又夫木集に「四つの海 時つ風 潮時に潮に伴 枝を鳴せぬ 王光の論衡に「太波静なり傳代なれば云々」天下泰平の意 時つ風 潮時に潮に伴 枝を鳴せぬ 王之世、五日一風十日一雨、風不鳴條」とある 逢ひに相生 泰平の代に逢ふ意の逢ひに 枝を鳴せぬ 詞に出で云ふも思ひなを引く。逢は枝なり。

それ草木

以下クセドメまでを賞讃したる詞を列ぬ。陽春 暖き 南枝花始めて開く 和漢朗詠集に「誰か春色送

時をわかず

他木の如く氣節の更化に更せられず。四の時 春夏秋冬 一千年の色 和漢朗詠集に「十八公紫霜

廻

本朝文粹の大江朝綱の文に「花に鳴く松鳥、水にすむ蛙の聲を聞けば生きとし生けるものいづれか秋をよまざりける」とあるを引きたり。

長能が詞

藤原長能は拾遺下歴代の集に「和歌の作者なり。其著なりといふ秘記に「和歌はこれ五汗の體なり詞に出すと秋とし心に知れざるを能くす春の林の東風に動き秋の夜に北風に鳴くも皆和歌の體に洩れず有情非情ともに秋の道を行かこすなり」とあるを引く。

十八公の萩、千秋の緑

前掲和漢朗詠集の「十八公云々」の句意を引く。十八公は松の別名。昔吳の國の下園と云ふ者夢に腹上に松の生いたるを見て十八歳の時公となり。故事あり。

始皇の御爵

秦の始皇而を樹下に避け其樹に五支夫の位を授けたる故事。

真なりの意 松の葉の云古今集の序に「松の葉の散り失せずしてまさきのかづら長く傳はしとあるを引く。まさきのかづらはまさきづら」と云ふ。また「草の一種、長き葉に用ふ。土も本も」太平記に出でたる紀朝雄の歌「草も本もわが大君の國なればいづくか鬼の柵なきべき」とある詞。睦まじと云伊勢物語に「前掲古今集の「われ見ても」の歌に續けて出でたる歌。詞書に「御神現形し終ひて」とありて「睦まじ」とは白波みづ垣の久きせより祝ひをめでき」と

みやつこ神の仕人 西の海云續古今集に出でたる卜部兼直の歌「西の海やあときが原の汐路より現れいせし仕人の神」とありて後ジテ住吉明神の東現の謠とす。

浅香潟玉藻刈る浅香潟は昔攝津住吉にありし浦なれども地勢が變じて今は和泉國泉北郡に屬し五箇莊村として僅に面影を存す。萬葉集に「刈るはみちなる住吉の浦に玉藻刈りてな」又新撰古今集に「身にしめと吹き」にけらしな玉藻刈る淡香の浦の秋の初風」などありにより「玉藻刈る」と續けたり。

青海波以下攝々の樂の名を列ねて神の舞樂を叙す。青海波は唐樂の曲名神の舞樂を助けて或は舞ひ或は歌ふ多量の舞姫。

青海波以下攝々の樂の名を列ねて神の舞樂を叙す。青海波は唐樂の曲名神の舞樂を助けて或は舞ひ或は歌ふ多量の舞姫。

還城樂唐樂の名、命を延ぶと續けたる

小忌衣大嘗會新嘗會などに用いる祭服なれど亦堂

千秋樂唐樂の名、民を撫でと續けたるは堂平の意に懸けて民を慰撫する由に云いなしたるなり。

颯々の聲松風の聲を表とし、舞の袂の繞る様を象としの祝言とし。て歌樂極まりなき所に一曲の終を結ぶ。

還城樂唐樂の名、命を延ぶと續けたる

小忌衣大嘗會新嘗會などに用いる祭服なれど亦堂

千秋樂唐樂の名、民を撫でと續けたるは堂平の意に懸けて民を慰撫する由に云いなしたるなり。

颯々の聲松風の聲を表とし、舞の袂の繞る様を象としの祝言とし。て歌樂極まりなき所に一曲の終を結ぶ。

真之脇能

高砂

正月

前ツレ 廻(松の精) 後シテ 住吉の神
前シテ 尉(松の精) 神宮友成

早次第上(三ノ) 今を初の旅衣。今を初の旅ごろも。

目も行く末ぞ久き。そもくこれか

九州肥後の國阿蘇の宮の神

友成と我が事あり。われいまだ都を

見ざる程よ。此度思ひまきち都よ。又

よまていづてあれ。播州高砂の浦を

見ざる程よ

高砂

道行上(三ノ) 旅衣。末はるぐの
 都路を。末はるぐの都路を。けふ
 思ひたる浦の浪。船路長閑けき春風の
 幾日かぬらこ跡。末はるぐ白雲の逢ふと。
 かも思ひり。播磨湾高砂の浦よ
 著きよら高砂の浦よ。かよらり
 高砂の松の春風吹まゝれて。尾上の
 眞ノ一ノ声

鐘も。細音くあり。波の霞の磯がくれ。
 音こそ。潮の満干あり。誰をかも
 知る人よ。せし高砂の松も昔の友あ
 らで。馬場の雪の積り
 積りて。老の鶴のわらふ。残る有明の
 春の霜夜の起居よ。松風ののみ聞ま
 ありて。心ち支と。菅笠の思を。球よる

高砂

浦風の落葉衣の袖そくして本陰の
 塵をあげよ本陰の塵をあげよ
 上報
 處の高砂の處の高砂の尾ぶの松も
 打切せし
 年あつて老の愛のまじりぬの
 下陰の落葉衣の袖そくして本陰の
 塵をあげよ本陰の塵をあげよ
 打切せし
 獨りしあまの松もくまの松も

名所もあまの松もくまの松も
 名所もあまの松もくまの松も

里人を相待つ所よ老人を婦人せり。

高砂の松もくまの松もくまの松も

高砂の松もくまの松もくまの松も

高砂の松もくまの松もくまの松も

高砂の松もくまの松もくまの松も

高砂の松もくまの松もくまの松も

だまして入
 トモ

高砂

三

こも。平年の色に雲のちやよ深く。又
松花の色十廻りもみくつある
たよりをねが枝の言の葉草の露
のこぶちを磨く種とあつて 花の
まのり物にまゝ 東島のあびよる
とあや 然る長能言葉よも有情
非情の其聲もあ致よもい事あ。

草木土沙。風聲水音まで萬物の
こもるふあり。春の木の東風も動き
秋の露の北露よあくも皆和歌の姿
あらまや。中よも此松は萬木も勝れて。
十人の粧ひ。千秋の緑をあつて。
古今の色を見せ。始白皇の侍衛よあつ
つる程のよありとて異國も本朝も

萬民の心を賞翫せし高砂の尾よ
 鐘の音ききあり 曉かけて霜の置け
 るも松の枝の葉色し固く 條緑きち
 寄る陰の朝夕もあけも落葉の
 畫もせぬ真あり松の葉の散り笑
 せざして色し猶真松のあらあは
 せのたそ入あつひる常盤木の中よも

名高砂の末代のたのまも相生の
 松ぞめでたき げよ名を得たる松が
 枝のげよ名を得たる松が枝の老木の
 昔あらうして其名をあらう給入や
 今何ぞいひていかにして高砂の
 江の相生の松の精も又婦と現れ来り
 たり 地上 名所 松の

高砂

頭カミを挿カせシぎキ 月ツキの雪ユキ衣キは落オつク
神舞ああまたまたの影カゲ向ムカややああまたまたの影カゲ向ムカやや
詠頭打切月ツキ位イ吉キチの神カミ遊ユは影カゲを挿カむムああららたた
 ままの舞マヒ姫ヒメの聲コエ
 も登ノボむムああららの松マツ影カゲも映ウツるル
 青アヲ海ウミははららの神カミと君キミ
 の道ミチままの都ミヤコの春ハルは行ユクくク

久キウきき代ダイの神カミかかららの鼓ツヅミの
 拍ヒタ子コを挿カ入イてテままの終ハヤシ入イは奴ヌたちチ
世西ニシの海ウミ標ヒラ原ハラの浪ナミ向ムカよりヨリああららままれれ
 出デでで神カミ松マツの春ハルああれれやや残ノコの雲クモの
 浅アサ香カウ沼ヅ 玉タマ藻モ刈キある岸キ陰カゲの
 松マツ根ネよよの腰ウシロを摩サれれババ千チ年ネン
 の翠スズ手テは満ミててりり 梅ウメ花ハナを折ヲつつてて

田村唐が鈴鹿山に鬼神を平げしこと史籍に無し。唯弘安元年教使記と不吉に
田村唐が此山の鬼女鈴鹿姫を祀り後皇と略したる事を記せし由俗説辨に出づ。 呪詛諸毒藥
法華經普門品に呪詛諸毒藥、念彼觀音力、還著於本人とあるを引く。意は他人を呪い毒藥を以て
之と害せんとするとも其人觀音力を念すれば其害は還つて害せんと企てたる本人に帰著すべしとなり。

二 卷 目

田 村

三 月

シテ 田村丸(前・童子)
口キ 僧

早次(三人)ヨコク

鄙の都路隔て来て。鄙の都路隔て
来て九重の春よ急せん といふ東

國方より出でたる僧よての。われ来た

都を見まごの程よ。此春思ひまごての

道行上(三ノ)

頃もはや。弥生あまごの春の空。弥生あ

まごの春の空。影も長閑よめごの日の

見せの外程よ

打切ヤ

田村

霞む其方や音羽山ハツノヤマの響音も静シズカ
あひ清水寺しみずのてらも著あはるわつり清水寺しみずのてらも
しんもてしシノ 景あはる程ほどの都みやこ

清水寺しみずのてらもあは申まをむつらわつりあひ櫻うづもの
盛さかる思おもひを人ひとを待まちて委まかす春はるの又手て向むかひ
あひ又けり地ちを権けん現げんの又たたはあり

打上

サト

三十三の

身みの秋あきの月つき五濁ごじやくの水みづは景清かげきよ
千早ちちはやあつ神かみのお庭にわの雪ゆきあはれや
白妙しろたへよ雲くもの霞かすみあはれあはれあはれあはれ

小話

下歌

打切

上歌

打切

霞もらるゝもれて。何れ櫻の梢ぞと。
見渡せばや入し重げよ九重の春の空。
四方の子あまのしるし。時よも思はる。
氣色しあむ時よも思はる。時よも思はる。

つとむるさるゝのさかきと申すかきかき
のさかきと申すかきと申すかき
さかきと申すかきと申すかき

持ち。本陰を清の給ひるも。花守
よと申すかきと申すかき
権理よは申す者あり。さかきの頃
本陰を清の給ひるも。花守
又よと申すかきと申すかき
者よと申すかきと申すかき
思ふも。さかきと申すかき

しく語の給ふべし。今もその名は流れたる
 清光寺の申さる。大同二年の法草創。
 坂上の田村丸の法願あり。昔大和の國
 子嶋寺のころは所々覺ゆるいふ門。
 生身の觀世音を捧まこと誓ひしよ。
 ある時大津川の川よあり。金色の光
 かりき。昔もなほいふ見びく入の老翁

あり。彼の翁語つてとて。あれい
 との行處居まじしう。女への檀那を
 待ち。大伽藍を建まじしう。東を
 さして飛びまじしう。行處居まじ
 しう。この觀音菩薩壇の由再説。また
 檀那を待てしありし。これ坂上の
 田村丸。今もその名は流れたる

清水の名は流れたる清水の深き誓も
敷くは千手の手の手のさうぐ様々の
誓普くして國土萬民をまらさるの
大悲の影ぞあつたあはれはよや安樂
世界あり。今此世は衆生の出現して
われらが為の觀世音あまの思
あまのやあまの思あまの思

早稲

分頭面白からいへるまの誓はら
あまの思を流したる皆名所よ
らん所教へるかへる皆名所よ
所尋ねる教へるまの南よ
當て塔の四の所
よの所
今熊野の自り

都の春の空のぼりよ時めける粧ひ青揚
の影又さうりまて風長閑ある音羽の
籠の白糸のくろり返りかへしても
面白やあつたやあ地ま権現の花の
色もいひあり唯頼め標茅が原
のさも草地おれせの中よあらん
あまのほ誓願壺うらもものを清

地拍子
春べやあらはも
春べやあらはも

●獨吟

水の緑もあや青柳のびよも枯れ
たる木ありとも花櫻木のよそほひ
しづくの春もああめで長閑さ影
有明の天も花よ酔さうや面白の春
べやあらあもさうの春べや打切げよ
氣色しき思ひあらよ唯人あらぬ粧ひの
其名いさあや入やらんシテ上いさあも

地拍十
此寺よ

り。其名も白雪の跡を惜まらば
寺の端のふちを踏むや。寺の
り。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
遠のなるまも知らぬ山中の
おぼつらあも思ひ給さ。我がゆく
方を見よ。地を権現の馬前
より。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

早敷
(三人)
持話

坂のよの田村堂の軒も。月の
むら戸を押。あけて内よ。らせ給ひ
けり。内陣よ。らせ給ひ。けり。
夜もま。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
散るや。櫻の陰よ。居て。花も妙ある法
の場。ま。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
讀誦も。此所。經を讀誦も。

此所
二二二

後三上
一層ありあつたの由經やあ。清水寺の
瀧つ浪。まこと一河の流を汲んで
他生の縁ある旅人よ。言葉をおきて
夜聲の讀誦。これぞまことち大慈
大悲の觀音擁護の結縁なり
早かん上
おやあはれのまよふやまて
男體の人の見え給ふいふありて

まままきり
今何ぞいひてお
人皇五十一代平城天皇の忠字よ
あり。坂上の田村丸 東夷を平
らげ悪魔を鎮め。天下泰平の忠勤
たりしも。即ち當寺の佛力あり
然るよ君の宣旨よ。執州鈴鹿の悪
魔を鎮め。都鄙安全よあまべりよ。

●獨吟夕七留マデ

サレ上

田村

丸

仰オホキセよよつて軍兵ツノウを調ツクへきてよオホキセ赴オホキセく
 時節トキセツよオホキセまうて此コノ観音カンオンの佛ブツ前ゼンよオホキセ来オホキセり。
 祈念キネンをオホキセいたし願ガンせしよオホキセかきこの
 瑞驗ズイケンあらたあひぞオホキセ歡喜カンキ微笑ミウエの頼タノ
 をオホキセまゝしてオホキセ急イサぎオホキセあひオホキセ徒タよオホキセおオホキセつオホキセまオホキセつオホキセり
 普オホキセ天オホキセの下ノ卒ソツ士シの中ノらオホキセくオホキセ地チよオホキセあら
 たいオホキセやオホキセらオホキセるオホキセのオホキセあオホキセのオホキセ開ヒラきたオホキセいで

● 獨オホキセりオホキセにオホキセもオホキセもオホキセも
 足オホキセ並オホキセやオホキセ。

遠オホキセ坂オホキセの山ヤマを越オホキセゆオホキセぬオホキセ浦ウラ波ハの粟津アヲの
 森オホキセやオホキセあオホキセげオホキセろオホキセよオホキセの石山イシヤマ寺テをオホキセろオホキセ棒オホキセ
 みオホキセこオホキセれオホキセもオホキセ清オホキセ水オホキセのオホキセ一オホキセ佛オホキセとオホキセ頼オホキセりオホキセあオホキセひオホキセよ
 池オホキセ江オホキセ路オホキセやオホキセ勢オホキセ田オホキセの長橋ナガハシをオホキセまオホキセらオホキセりオホキセ駒オホキセ
 もオホキセ足オホキセ並オホキセやオホキセ勇オホキセむオホキセらオホキセんオホキセ既オホキセはオホキセ伊オホキセ勢オホキセ路オホキセの
 山オホキセ谷オホキセくオホキセ弓オホキセ馬オホキセの道オホキセもオホキセなオホキセあオホキセらオホキセんオホキセと。
 あオホキセらオホキセ色オホキセみオホキセせオホキセたオホキセるオホキセ梅オホキセの枝オホキセのオホキセ花オホキセもオホキセ紅オホキセ葉オホキセ

地拍子
三拍子
土も本も
三拍子

も色もあつて。猛も心もあつたあねの。
キの本も我々大君の神國よもこより
観音の所誓佛力としし神力もあほ
数々ままから待ちつゝ知らず
鹿の鈴鹿の文もあつたかまも思
へど佳例あつて。さる程よ上河を
動かす鬼神の聲。又よ郷音も地よ満

三拍子
三拍子
三拍子

● 節
カ

ちて。満月青山動揺せり。カサリ。カサリ。
鬼神もたつたあつた。昔もあつたあ
あり。千方いづら。一隊屋もはく。鬼も。
早意を猜へ。天野も。千方をかまら
け。鬼もあつたあ。あ。あ。あ。あ。
ま。あ。あ。あ。鈴鹿。あ。あ。あ。あ。あ。
伊勢の海。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

● 仕
舞

三拍子

三拍子

地拍子
志濃の松原

安濃の松原むらだち来つて鬼神の
黒雲鐵火をまうつ。數千騎よ
身を變じて千のいさへも見えたる
所よあしむる目もあしむるあしむる
見よあしむる身方の軍兵の旗の
よよ千手觀音の光を放つて虚座よ
飛行し千のち手毎よ大悲のうらよ

あつたにありが
なや

地拍子
志濃の松原

智慧の光をばあて。一度放せば千の
光あつて雨霰とあつてあつて鬼神の
よよおのり落つていさへもあつて
あつて鬼神の残らも討たれよけり。
ありあつたありあつたや真よ呪詛。
諸毒薬念彼觀音の力を合せてあ
あつて還著於本くまあつて還著於

田村

田村

漢著きたる中に乗り心ありて諛ふ。中入の地も大方同じ心もて進み止めの通りにて鏡め夕園の中に花として消え失せたる體に諛いとむべし。後の出は華やかなる遊女の舟遊びの權を叙したる諛なれば舟歌の心にて調子好く精麗なる風情あり。歌の「や」は前を取らず調子を更けて出、馳み疾く諛ふ。クリは調子を新にして勢の高く取り健やかに諛ひ、クセは静なる中にも幾分の運び心あり。舞あつクセなり。「うつろふ」の打切まで序、それより上端まで破、下急の位なれど何れも出を旨として諛ふ。「面白や」の一句は長閑に引立て、諛ふべし。「随縁真如」は乗つて寛りと出、以下乗合ひ好く諛つて微妙莊嚴の心を以て諛ひ納む。

注意すべき諛ひ方

七枝表の「むつかしや」の「は少し大きく扱ひ廻したる後を上音のまゝに元分に折つて「しや」と諛ふ。「下」と節附あれども中落しまでは落さず、さりとて上音のまゝにも非ず。移ひて云へば中落しより高く、スクに落しより低き程に諛ひ諛ひて抑ゆるのなり。舟遊の「取りあへず」、花遊の「蘇武が旅雁」など同ト扱ひなり。又八枝表の「紅葉の秋の夕べ」及「黄纒の林」の句切は同奏しなれども拍子ありの關係より文字の足らざる分を引きて諛ふ。二と一たるはこれが為なり。

辭解 月は昔の友云

玉葉集に「月影を昔の友に採りける」と又「獨のみ津間に宿る友なり」とせば真に獨世と諛れ得る。月を見て昔の友を面影にまづつたなどあるを引きて、月をさへ昔の友は何處なると云つたり。

津の國

今津 鴨殿 上枝の南。津川に流れたる地なり。

江口

江口の名は其大字に換れり。昔は水驛として遊女を以て聞かたなり。

法師云

西行法師江口の里にて賤が屋に宿りせんとしけるに主の遊女拒む振なりしかば「世の中をりぞ」と返歌したること撰集抄に見ゆ。新古今集には遊女の名を妙とし其歌の第一句を世を廢ふと有り。此諛は新古今集に由ると見えたり。

世の中と云

世の中と云 後のいひたる人ほそまきまにすぞに續く詞、何人か心得難む程敬者心の疼き人よと不意。假の名に人世の意を偏す。

心得ず云

色好み 古今集の意。世を廢ふ云 遊女の歌。一首の意は世を廢ひ捨てたる人なれば假の宿なる世の中に心を止むなと云いたる迄なりとの意。

捨人の世語に云

捨人の世語に云 捨人のめき世捨人のかゝる世語に心を止め給ふはの意。我が花の

一樹の陰云

一樹の陰に宿り一河の流を汲むも他生の縁なりと云ふは諛。

あへねば云

あへねば云いも終 宇治の橋姫 右今集に「さむしちに衣片しき今宵もやわれを待つてむ宇治の上と哀に覚ゆるなり。よしや吉野の 風雅集に「世の憂さは何處も花に 愁めばよしや吉野の奥も忍ねど」。

秋の水云

秋の水云 和漢朗詠集に去速、夜雲收 遊女が棹さし 因果の推移を十二種に分ちて十二 盡月行進 ながら秋ふ唄 前生又前生 愚速發心集に「とこいなへに三途 因縁といひ之に任つて推移するを流轉といふ。此等の展轉を車輪に譬へ飛鳥に喩ふ。既に發心の謀を失ふ或時は通人の中 天上の善果を感ずれども顛倒迷誤して未だ解脫の種を殖さず 下光生又光生都て生々の前を知らず 来世福来世金く世々の終を辨あること無し」(原文漢文)とあるを引用して悟り難き人世の 重からざるを述ぶ。 罪業深き身 女を指す。佛教にては女人は 重からざるを述ぶ。 河竹の流の女 平安物語に「さきふりに流みしやらで川竹の世にたれ 毎も名をよみしとあるを借る。川竹の節ねあきを遊女の愛き 事取あきに登言へ、又川の縁に流と云ひ、遊女の寄る遠く空めあき身に云ひなすなり。

紅花の春、紅葉の秋

紅花の春、紅葉の秋 花と葉と、春と秋と朝と夕と相對せむ。共に紅の 語を用いたるは新柳なる様に譬へんとすなり。

紅錦繡の山

紅錦繡の山 錦や綾の如く紅葉しき春の山、緞纒染の如く黄朽葉美しき黄葉の林。 松風 緞纒は昔の較染の一種、白氏文集に「黄纒緞林寒有葉」。

蘿月云

蘿月云 本朝文粹に「松風蘿月皓老於煙嵐之阿」とあり。風月に寄せて諛らひし 翠帳紅 賓客も一時の友にして永き交にあらずの意。蘿月は萬葉を照す月。

人倫向 貪著、愛執

人倫向 貪著、愛執 佛教の語、方慾を貪りて難れ 難しとする心と、是に耽溺する心。 妄言 六根、六塵、五塵、六欲 佛教の語。六根は人の外物を根受する機關の六部分の總稱。 六塵は此六根に起る汚

おてあつたての御宿に

申すに御宿に御宿に

給ふ御宿に御宿に

葉の御宿に御宿に

宿の御宿に御宿に

あつた御宿に御宿に

の御宿に御宿に

あつた御宿に御宿に

の御宿に御宿に

あつた御宿に御宿に

の御宿に御宿に

あつた御宿に御宿に

の御宿に御宿に

あつた御宿に御宿に

の御宿に御宿に

●御宿に入マデ

打切

惜イむワとナ浪ナのカ返エらナぬトもス今ス
 こキもキ捨シ入リのガ世ト語リよシふシ留トめト給ヒて
打切げトもシやシらシおシのモ物ガ語リ聞キけテ姿スも
ロキたシもシあシらシよシあシげテりシよシ人シいシらシあシらシ
シたシもシあシらシよシたシもシむシ景ガのシほシのシくシ
 目シをシ離シてシあシらシよシこシのシ流シのシ君シ
シとシ目シをシこシはシりシやシ地上のシ備シのシ疑シあシら

磯シのシはシとシ清シくシのシ跡シあシれシやシあシらシよシ
 位シ文シとシ我シらシ宿シのシ梅シのシ立シ枝シやシ見シえシ
 つシらシんシ思シのシ外シよシ君シがシ来シまシせシらシよシ
 一シ樹シのシ陰シやシ宿シりシけシんシ又シハシ一シ河シのシ流シ
 のシ水シ汲シみシてシあシらシよシあシらシよシあシらシよシ
 君シのシ坐シ敷シをシあシらシよシあシらシよシあシらシよシ
 けシりシ聲シがシあシらシよシあシらシよシあシらシよシあシらシよシあシらシよシ

●獨吟ヨリニテモ

五

五

備へ口の者の坐雲假も頂くもさよ
 言葉さあか〜
 浮めこの待詠 上敷
 言らぬあか〜
 渡り河さよ 待詠
 見えたる不思議も回も回もたの
 不思議さよ 上敷地 一声 打切
 三舟さあ〜 待詠

●同吟

浪枕とあ〜 待詠
 見あらしの鷺あぬ身のはああかよ
 佐用娘が松浦鴻また〜 袖の涙の
 もろこ〜 舟の名残ありまた宇治の
 橋娘もさあ〜
 身のおもあ〜
 身のおもあ〜
 身のおもあ〜

月登文蔵の舟の面々遊女のおまた
 うたよ謹色おめおめ入影こそめ
 誰人の舟やらこあは舟を誰が舟
 一消逢の月の夜舟をは臨見せら
 一おめおのの遊女もなこつてら

昔の遊女は舟をは臨見せら
 舟の面々遊女のおまた
 月登文蔵の舟の面々遊女のおまた
 うたよ謹色おめおめ入影こそめ
 誰人の舟やらこあは舟を誰が舟
 一消逢の月の夜舟をは臨見せら
 一おめおのの遊女もなこつてら

仕舞クセ留マデ

ま〜あまの河竹の露の女もあゝなから
せの報まで。思ひやるこそ悲しけれ
紅花の春のあたら。紅錦繡の山
粧ひをあまの思さうも夕入の風よ
さきさきの紅葉の枝の夕入黄顔顔
の林色をさきさき朝の霜よ
うらうらふ。松風薙月よ朝をりたま

打切ヤク

賓客もきつてまの事あ。翠帳
紅圍の枕をあらへ。妹背もりの
まよあ隔つらん。およそふあから草花
情ある人倫らり哀を痛む人の
かゝる思ひ知りあから。時を色よ
深又貪著の思あから。又ある
時。聲を聞き愛執のふらと深か

愛執の
モ

エ
モ

注意すべき謠ひ方

四枚裏「人ごころ」の「ろろ」に附いたる「鳥」は一度張りて音尾を落す節に似たりとも是は中音のまゝ謠ふものなればハル及下の記入無し。「ろろ」の二字に亘り三ツユリ(「ろろ」)の節に扱ふものなり。又十一枚表の「松山」と「浪」を以て「と」の句間に(「ヤア」と記したるは拍子當りの關係上「ヤア」の間に同じく拍子當りを取り必要あるを示すものなり。

上臈

本集は身分貴き婦人の縁なれども轉じて輕き女の美稱となり、更に「遊女の身の憂き事堅く行く末の定め難きと嘆けりたり」。わけ遠ふ云 後千載集に「分け

都をば

後拾遺集に「都をば霞と共たまらば音白河 音に白河の意を以て白河に白く思ふ。野上 不破郡關原野の東二十餘、昔中山道の名跡なり。夏神日記に此所の遊女の事を記せり外、左右番歌合、賴政家集、新拾遺集などの歌にも見えて古く遊女を以て關原と地なり。此等の遊女は長者の家(後の木津)に存りて旅人の枕席に侍りたる者なり。

長

長者 亂の社 春日野の云 古今集壬生忠岑の歌、原歌の末句「君はも」。仄に見し。由な

夕人

類も「夕人 朝も」か 別衣 著別れ衣。今は日を重ねと後けたれど古くは日も重ねと云い悪く。新拾遺集に「秋風の便ならは

げにや祈り

古今集に「悲せとて清く洗川にせしは被神は受けずもかりにけり」。秋の意は思をすまると神前に身を被いたれど神は此願を受け給はぬと思えて猶人が思ふと云ふ。

空言や

其歌ともし人の誓と。澄まで 心の清 心だに云 昔の語なり 真如の月 心に迷を

衣の玉

法華經に「人ありて親友の家に行き響應を受けての帰途記及寶珠を其人の衣の裏に

班女の扇

漢の成帝の寵を受けし班婕妤といふ美人、後趙飛燕といふ女に寵を奪は

月重山に

和漢朗詠集に「月重山に 鶯啼 花琴上に 章孝標の詩に「梅花帶雪照

籠の山

新拾遺集の望月の詩に「隔軍在蒼園之露未晞、僕夫待衛鶴籠之山欲曉」。鶴籠

しばし枕に

枕にさし入る月も程なく傾きて再び孤獨にならるるを云へり。こは鶴籠の山と近江の鳥籠の

翠張紅圍

ましく飾られたる張 余 悲けて寝 同穴 借老同穴と後く詞。老と共に

比翼連理

楊貴妃と敬了、長恨歌に「七月七日長生殿、夜半無人私語時、在天願作比翼鳥、在

驪山宮

楊貴妃が存りし あたり詞 教み難 立ち盡して 盡きぬ思いつまでも 頼めて

園雪の扇

夏もはや下再び班女の記事を引く。和漢朗詠集に「班婕妤團雪之扇、代序風兮長息

繪にかけ

白氏文集の白羽扇の詩に「盛夏不銷雪、終年卷畫風、引秋生手裏、藏月入懷中」

形見こそ

古今集に「世の常の秋風をば教の 扇とは空言 遠ふ

岩手の森

陸奥の神岡の名所。云はでの志に 末の

折ふし黄昏に

たもがれは夕暮時、源氏物語夕顔の巻の「よりて

あはれいづれも母をさるる^{コキ}昔に人のあはれ

あはれいづれも母をさるる昔に人のあはれ

都へいづれも母をさるる昔に人のあはれ

いづれも母をさるる昔に人のあはれ

あはれ宿願のむねもさるる昔に人のあはれ

紅く葉のむねもさるる昔に人のあはれ

^{後三上}春日野の舞をさるる昔に人のあはれ

草のはらりも母をさるる昔に人のあはれ

人よ入馬の後の日を重なる昔に人のあはれ

せや秋風の便もさるる昔に人のあはれ

きりも入馬の後の日を重なる昔に人のあはれ

おもひも母をさるる昔に人のあはれ

きたりも母をさるる昔に人のあはれ

みても母をさるる昔に人のあはれ

世

箱根玉津島貴船や三輪の明神は
夫婦男女のわたらびを守らんと誓ひ
おたがひも此神よ祈誓せらあまら
駿のあまを護ふ再拝 察せよ
我ら名もたかむまはり 地え人知れ
こそ思ひそめ ぐあから恨みの
ひとにりや 祈りつち手洗

下敷地
置か所
上敷
心だよ誠の痛よあまびあま誠の痛よ
あまびあま祈らざらも神や守らん

ひびく

地
 風のたふらうと思へば。自らもはや枝の
 窓の秋風ひやくあよ吹きて落ちて
 團扇の扇も雲あり。名を問ふはれぬ
 秋風怒あり。や思へばこも
 げよ逢ふ別あへば。其報あれ
 今なら。中ちみ入。想むま。思
 れぬ身の程を。思ひついで。獨居の。

●獨吟
仕舞中ノ舞

シテワカ上
 月をかくして懐よ。持たたるあよ。さ
 娘が。園ぞ。か。一。絵よ。あ。ひ。の

拍子板
鹿の音

地上
 袖も。重あ。わ。其。色。衣。の
 つまの。あ。わ。ひ。の。夕。暮。の。月
 月も。あ。い。あ。り。秋。風。の。吹。け。り。葉
 の。そ。よ。の。便。も。聞。か。で。鹿。の。音
 空の音も。あ。ら。べ。の。葉。あ。ら。の。あ。や

花を書きたる扇あり。此上の惟老よ
 紙燭召して。ありつる扇。信實せよ
 互ふ。そのぞと知られ白雲の扇の妻の
 またみこそ妹背のあかの情あれ
 妹背のあかの情あれ。

鶉詞

解題

此曲は法華の僧が甲斐の國石和川の邊にて嘗て殺生禁斷の所に鶉を使ひ斜にあり森の刑に
 せられし鶉翁の亡室に逢ひ、是を弔ひて成佛せしめし事と作り。僧の名は云はざれども安
 房の清澄より出でたる由名来りて暗に日蓮上人の一行なりしことを知らしめたり。原作者もワキを日蓮
 とて作り傳ふ所ありて名を明にせざりしものか。諸曲以後のものとも見られども此事又は是に類する
 事日蓮布教の口碑に多し。現に同國石和村東所なる遠妙寺は此鶉翁清澄の古蹟なりとて今も
 時の遺物と稱するものを秘藏せりと云ふ。又名勝志は是を昔此地に流され居たりし大納言平時志に
 系し事として記せり。作曲に就きては世子六十以後申樂談儀に
 江波左衛門が作りしとせ阿孫が補ひて完成したる由見ゆ。

能之變式

能に真如之月、又は空之動の小書ある時は形を變化せむる關係上一聲の後サシ、
 下歌、上歌の詠を抜き、直に侍堂により休む由の詞に倣く。

詠ひ方梗概

阿漕、善知鳥など、似通ひたる曲なれども全篇属の位とそれ等よりも軽く扱ふ。前
 後兩段に分れたれども、事件は凡て前段に盡され、詠ひ所も亦前段にあれば、こ
 れを特に大切に讀みべし。情趣に連れて緩急多けれども

シテ

前は賤しき徳翁の亡室なれば位と
 前後に取らず、唯終始底務き所

ありて温やかなる寂しみを本とし沈痛なる時影に掩はれたる心なり。一聲は軽く抑つて寂しく
 詠ひ也。サシは少しさらりと扱ふ。詞にて寂しく沈み腹らにし、句々空の運びを取り、下歌にて確りと
 鎮め、上歌は素直に積さらりと讀ふ。詞一句ありて「や」と心附く所確りと下より讀ひ、「これは往來の……」
 とワキに云ふ。ワキとの問答はそれごとく心持し、「このう其懸使ひこそ……」はワキツレの詞へ懸け氣合
 かりて讀ひかく。「和や」ながら……の一頓は内へ取つて心持し、「こそ……」以下の詠は確りと身を入れて
 詠り、句毎にそれごとく心持あり。漸次詠める心にて而も落着き好く進み、「其時左右の」と静に鎮めて
 詠ひ、「其懸使ひの……」と下にとつて細むるなり。又「既に此夜も……」は氣を更へ前より氣を起して確りと
 と讀ふ。後シテは阿漕王なれば位大もとり終ると端りなく讀ふが宜し。ロシヤは字々粘みと持ら
 段々と寄せて使との受け
 詠ひ好く讀ふべし。

ワキ

日蓮上人なりとは云へ作柄に重き所ありしにあらざる、殊にはシテが賤し
 きものなればさまに位を取らず。昔の縁傳よりは少し故ありけり、
 詠ふ。次第は少し静に、名乗は確り、サシに落着き持ち、道行と静に確りと讀ふべし。纏めて調子の
 浮くと呼ばず。シテとの問答はシテが賤しき身なれば氣分の位ありて好し。待詠は落着きて確り詠ふ。

ワキツ

ワキと連呼はワキに從つて同音平やぐ、地 鶉の飯「面白の有様や」はシテの諷刺切りと引きつらて隱さず出、意をかけて空み無く爽快に又激刺たる様に諷刺やくべし。「際水の水」にて諷刺にさらりと運びよく素直なし、「月にかりぬる悲しさよ」と軽く静め、「舟舟のかり」と前に載れて静に諷刺の暗に消え入る意と諷刺を表すべし。後は全體にさらりと勢よく諷刺。ロンギは健実にキリはさらりと後健なるべし。

辭解

安房の清澄

清澄山中に千光山清澄寺といふ寺あり。日蓮上人の号也。三浦 武豊國今も三浦並といふがあれど古くは金

都留の郡

甲斐の國東方の郡名。朝たつもと誤けたらば都留を鶴に通はせて鳥の縁語を用ゐたり。

石和

甲斐の國東北代郡の一村。今は町と

殺生

生物を殺す事。佛教にては十惡の首に置いて大罪惡とせり。

雲の上人

若けいしやうといふ國に遊子伯陽といふ夫婦あり。常に月を

惜めどもかなはぬ命

惜みたりとて命は免れぬ命やうに猶も死にあらず

若しからぬ人

心置きと

拔群に

拔群に

一殺多生

佛教語。多くの生類を殺す爲に一生命を

罪障懺悔

佛教語。過去の罪惡を佛法

他國の物語

本には假名にて書きたるも漢字を

向後

罪人の身と實卷

撮して

撮して

業力の鴉

業力の鴉

使ふ

鴉使ひの役を免れぬ意を以て斯く云ふ

玉禱

單に禱の意。玉禱とは玉を以て禱す

鳥つ巢

鶉の巢を斯く云ふにや

淀

山嶽の淀川。淀川に鯉の上る様を

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

地

鶉の飯「面白の有様や」はシテの諷刺切りと引きつらて隱さず出、意をかけて空み無く爽快に又激刺たる様に諷刺やくべし。「際水の水」にて諷刺にさらりと運びよく素直なし、「月にかりぬる悲しさよ」と軽く静め、「舟舟のかり」と前に載れて静に諷刺の暗に消え入る意と諷刺を表すべし。後は全體にさらりと勢よく諷刺。ロンギは健実にキリはさらりと後健なるべし。

三浦

武豊國今も三浦並といふがあれど古くは金

都留の郡

甲斐の國東方の郡名。朝たつもと誤けたらば都留を鶴に通はせて鳥の縁語を用ゐたり。

石和

甲斐の國東北代郡の一村。今は町と

殺生

生物を殺す事。佛教にては十惡の首に置いて大罪惡とせり。

雲の上人

若けいしやうといふ國に遊子伯陽といふ夫婦あり。常に月を

惜めどもかなはぬ命

惜みたりとて命は免れぬ命やうに猶も死にあらず

若しからぬ人

心置きと

拔群に

拔群に

一殺多生

佛教語。多くの生類を殺す爲に一生命を

罪障懺悔

佛教語。過去の罪惡を佛法

他國の物語

本には假名にて書きたるも漢字を

向後

罪人の身と實卷

撮して

撮して

業力の鴉

業力の鴉

使ふ

鴉使ひの役を免れぬ意を以て斯く云ふ

玉禱

單に禱の意。玉禱とは玉を以て禱す

鳥つ巢

鶉の巢を斯く云ふにや

淀

山嶽の淀川。淀川に鯉の上る様を

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

地

鶉の飯「面白の有様や」はシテの諷刺切りと引きつらて隱さず出、意をかけて空み無く爽快に又激刺たる様に諷刺やくべし。「際水の水」にて諷刺にさらりと運びよく素直なし、「月にかりぬる悲しさよ」と軽く静め、「舟舟のかり」と前に載れて静に諷刺の暗に消え入る意と諷刺を表すべし。後は全體にさらりと勢よく諷刺。ロンギは健実にキリはさらりと後健なるべし。

三浦

武豊國今も三浦並といふがあれど古くは金

都留の郡

甲斐の國東方の郡名。朝たつもと誤けたらば都留を鶴に通はせて鳥の縁語を用ゐたり。

石和

甲斐の國東北代郡の一村。今は町と

殺生

生物を殺す事。佛教にては十惡の首に置いて大罪惡とせり。

雲の上人

若けいしやうといふ國に遊子伯陽といふ夫婦あり。常に月を

惜めどもかなはぬ命

惜みたりとて命は免れぬ命やうに猶も死にあらず

若しからぬ人

心置きと

拔群に

拔群に

一殺多生

佛教語。多くの生類を殺す爲に一生命を

罪障懺悔

佛教語。過去の罪惡を佛法

他國の物語

本には假名にて書きたるも漢字を

向後

罪人の身と實卷

撮して

撮して

業力の鴉

業力の鴉

使ふ

鴉使ひの役を免れぬ意を以て斯く云ふ

玉禱

單に禱の意。玉禱とは玉を以て禱す

鳥つ巢

鶉の巢を斯く云ふにや

淀

山嶽の淀川。淀川に鯉の上る様を

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

地

鶉の飯「面白の有様や」はシテの諷刺切りと引きつらて隱さず出、意をかけて空み無く爽快に又激刺たる様に諷刺やくべし。「際水の水」にて諷刺にさらりと運びよく素直なし、「月にかりぬる悲しさよ」と軽く静め、「舟舟のかり」と前に載れて静に諷刺の暗に消え入る意と諷刺を表すべし。後は全體にさらりと勢よく諷刺。ロンギは健実にキリはさらりと後健なるべし。

三浦

武豊國今も三浦並といふがあれど古くは金

都留の郡

甲斐の國東方の郡名。朝たつもと誤けたらば都留を鶴に通はせて鳥の縁語を用ゐたり。

石和

甲斐の國東北代郡の一村。今は町と

殺生

生物を殺す事。佛教にては十惡の首に置いて大罪惡とせり。

雲の上人

若けいしやうといふ國に遊子伯陽といふ夫婦あり。常に月を

惜めどもかなはぬ命

惜みたりとて命は免れぬ命やうに猶も死にあらず

若しからぬ人

心置きと

拔群に

拔群に

一殺多生

佛教語。多くの生類を殺す爲に一生命を

罪障懺悔

佛教語。過去の罪惡を佛法

他國の物語

本には假名にて書きたるも漢字を

向後

罪人の身と實卷

撮して

撮して

業力の鴉

業力の鴉

使ふ

鴉使ひの役を免れぬ意を以て斯く云ふ

玉禱

單に禱の意。玉禱とは玉を以て禱す

鳥つ巢

鶉の巢を斯く云ふにや

淀

山嶽の淀川。淀川に鯉の上る様を

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

かだみて魚はよもたあじ

かだむは心のゆが

玉島川

肥前府浦郡にある小川。一名玉島川

名の志、法華經より教に「妙法不思議の法を獲美するなり」とあり。二つも無く三つも無く法華經に經とは外國に修多羅といふ、聖教の都名なり」とありを引く。三つも無く方便に十方佛之内、唯有一乘法、無二亦無三」とあり。往來の利益釋迦は天竺ニ菩提樹の下にて眠一切衆生を成佛せしむる一乘法の絶對なる意。往來の利益めて成佛したるに非ず、又は本地々遠の佛が寂光淨土を出で、此穢國に往來し衆生を清淨すること既に八千返なり。釋迦の出現は其往來に返らずと云へり。此往來八千返の利益を往來の利益といふ。こゝには行きすがら説く教化の利益に於て云へり。

五番目

鶉飼

五月

前シテ 鶉使の靈 後シテ 閻王
ワキ 日蓮上人
モソレ 從僧

早稲

この安房の清澄より出てたる僧

早稲

まゝの。われまだ甲斐の國を見ざる

サシ上

程よ。此度甲斐の國行脚と志して

ヨソク

行く末らつと白浪の安房の清澄

まゝら出で。六浦のわたる鎌倉山

上歌
ワキ上人

やつり果てぬる旅姿。やつり果てぬる

同

旅姿捨つる身ありて恥ぢられぬぞ。
一夜假寝の草筵鐘を枕のよよ
向く都留の郡の朝きつも日たけて
越ゆる上道や湯あつし和の著れ
よらこ思ひかへしおもてり
鶉舟よももき舟人の後の園路を
とらふこころの中かきとる

思ひ捨りて其の夏又同く
鶉つちよ事の面白かよ
はるあつちの傳へ聞く遊子伯陽は
日よ誓ひて契ちあつち夫婦いら
あつちの今よ入も日あ
夜をいひて悲文給よあつち
あつちの日の夜にみやく

人まておたなつてミチ「かこさうして鶉使
 むさるる。くも目の稲ハこのは業ノよ
 やまらび回へつて鶉を使ひるコキ「備ハ
 苦一からぬへよてさうや。目由一わら
 はや技書筆よ年たけ給ひする。あさひ
 殺生セウシヨウのちさひ勿體ムツタヘあくる。あさひの
 業ノちてツル「あつて。餘の業ノよて

使ひる

...

身命シノイノチ「あさひハシ「作セ「光クワ「まて
 の入る。若年ニヤクシ「あつて業ノよて身命ノ
 ち技テ「あつて稲イネ「あつて目メ「あつてはハ「あつて
 あくるコキ「あつて由ユ「あつて入イ「あつて目メ「あつて思シ「ひ
 出だしたる事コト「の。あつてはハ「あつて年トシ「あつて前マエ「よ。
 此コノ「下カ「岩イワ「落オチ「て由ユ「あつて處トコロ「あつて通トス「つてあつて
 一ヒト「あつてあつての鶉使ウツクシ「あつて行ユク「まて遠トホ「くは程ほど「よ。

科の中の殺生ころすの事ことを申まをすに由よしりて可べし。

ぢよもふもふ思おもひて可べし。我われが家いへをりして

得える。ト夜よにちちももをを撮とりて可べし。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

其その時ときの僧そうももああたりたり。

眼前の境界悪鬼は無く。その
あの方若年の昔より。心河は遠く
其罪おびた。心は鐵れあまを
つ。金紙をよも事もあく。
無向の底よ。隨罪をさあ。僧
一宿の坊力よ。心は佛所よ。あく
らんと。悪鬼は心をわけて。鷄母を

弘誓の船よ。あ。法華の法法の助
け船。篝火も浮む。心はあ。迷の
多き心。雲も。實相の風あ。ら
吹。千里外も。雲はれて。真如
の月や。出てぬらん。ありがたの
事や。奈落は。心悪人を佛所よ
送り給ふ。其瑞相のあらた。あ

打上頭打切

法華の利益ふあはむ故。魔道は沈む
 羣類を救ふん為にまうたり。あはむ
 ありかたも甚言あま妙の一字にたて
 いまよそりの褒美の詞もて。妙ある
 法と説かれたり。經ふあま名づく
 らん。その聖教の都名もて。あはむ
 あり。三つあはむ。唯一乘の徳は

ありて。奈落は沈むはて。浮みかた
 き悪人の佛果を得ん事。此經の
 力あらざるや。これを見彼を聞く時
 といち見彼を聞く時。たゞの悪人
 あり。あはむ。慈悲の心もあはむ。して
 僧會を供養まする。あはむ。その結縁
 ようあり。佛果を菩提よ到るべし。

げよ。後。來。の。利。益。を。以。て。他。を。助。く。べ。き。
 力。あ。り。他。を。助。く。べ。き。力。あ。り。

柳

十

大正十年三月三十日印刷
 大正十年三月二十五日發行

觀世流改訂謄本
 第四版・大正版



訂正者 丸 岡 明 桂
 相續者 丸 岡

發行者 土居源太郎
東京市神田區今小路三丁目九番地

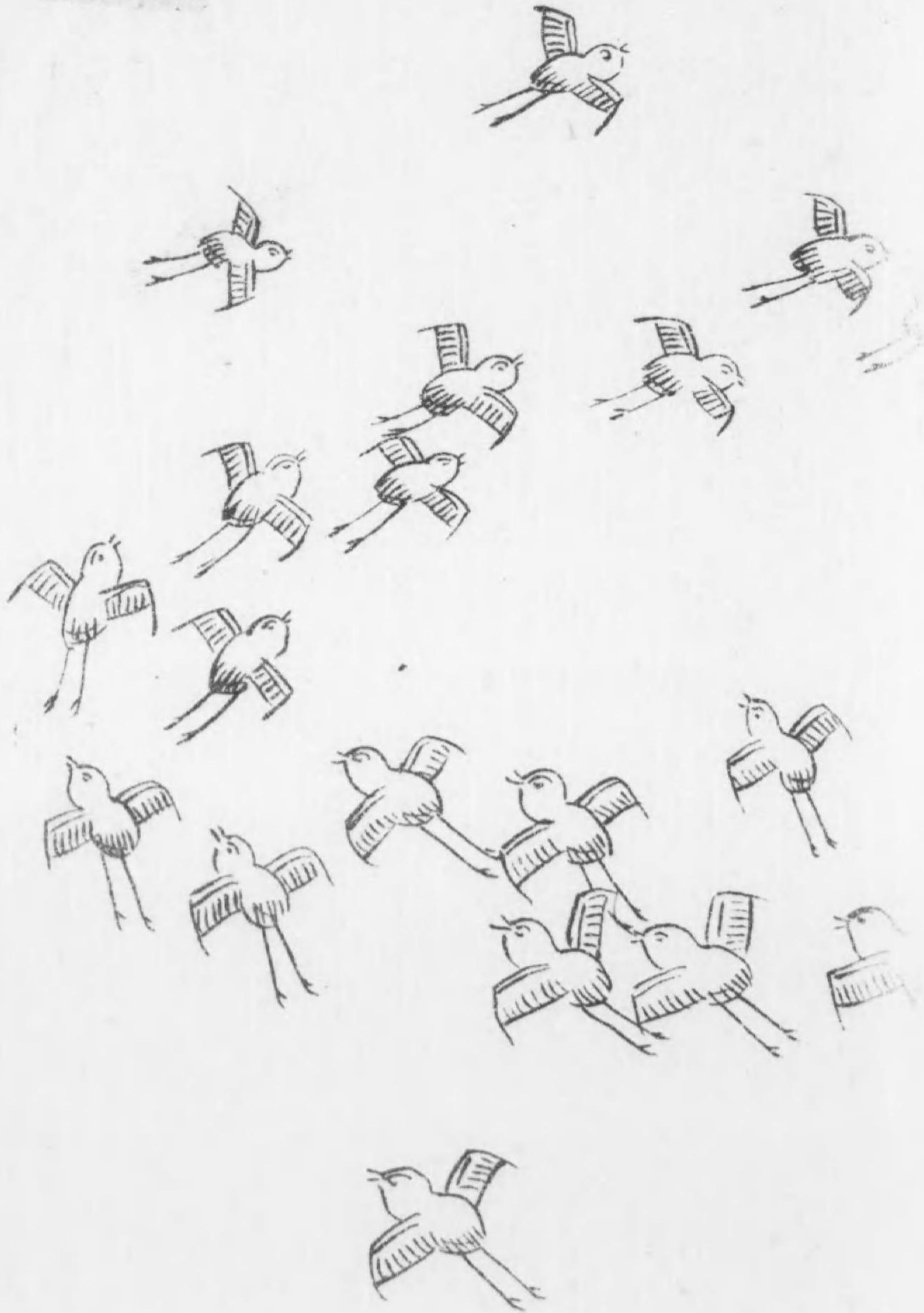
印刷者 鈴木彌作
東京市神田區東松下町十二番地

印刷所 信英堂印刷所
東京市神田區今小路三丁目九番地

發行所 觀世流改訂本刊行會

電話九段 二二〇五番
 振替東京 一三四七五番

170
1991



終

